

釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 4

春風に誘われて 鹿島釣狂

【浜厚真港のクロガシラ】



本日の釣果（最大40cm）

悪阻のため、わが家で13日間静養していた娘が職場に出勤したいという。とにかく臭いに敏感でまだ吐き気をもよおしているようだが、職場の仲間に申し訳が立たなく、年度末でもあり、せめて机上の整理だけでもしたいというのだ。親としては心配だが何時までもというわけにはいかないだろう。お腹の子のことが心配で、土別にまで付き添って2泊して様子を見た。土別市立病院での治療も効果あったのか、4月1日には出勤したようだった。しかし、悪阻がひどくて早々に早退したという。

士別から岩見沢の自宅に戻って一息つくと、もう釣り虫が蠢いてくる。前回の浜厚真漁港での釣りが忘れられないのだ。もう終盤を迎えていることだろう。この間、本当に天気がよい日が続いた。土日は天気が崩れる予報なので、明日の金曜日に目が覚めたら出発すると女房には言い渡した。

市立図書館から借りていた10冊の本の返済日が明日の金曜日だ。孫守りのために読み切れていなかったが返却しに行った。しかし、図書館は閉まっていた。31日(木)は月末のため閉館だったのだ。その帰りに生イソメを購入しておいた。前回は餌切れのため途中で断念したこともあり塩イソメも3パック購入した。道具等の準備は既に整えて車に積んである。

4月1日、まだ暗い内の午前3時には目が覚めてしまい出発することにした。浜厚真漁港には午前5時に到着した。前回入った場所には先客がいたので、その御仁に挨拶してから左隣りに竿を設置した。先客は昨晚から釣り続けているが獲物はまだ手にしていないということだ。その先客の右隣も同じように昨晚から釣り続けて7枚の釣果があったという。



手前の3本が私の竿

私が竿を出した胸壁の前には低いテトラが並んでいる。胸壁越しにはそのテトラが見えないために魚の取り込みには気をつけなければならないところだ。さらに左方向にはテトラが^{うすたか}堆く積み上げられている。風向きが変わった場合は道糸がそのテトラに擦れてしまうだろう。幸い今日は南からの微風でそんな心配はない。事前に脚立を購入しておいた。小物ならゴボウ抜き出来るが、大物が掛かった場合、胸壁に上って取り込まなくてはならな

いからだ。タモは胸壁の上に置いた。

への字で竿を出していた御仁は、3本の竿のうち2本をへの字の正面に向かって竿を出していた。そして、1本を私の正面方向に投げ入れていた。仕方がないので私は、彼の仕掛の更に左へと斜めに3本の竿の仕掛を遠投することになった。その左はテトラが山積みになっているので気が抜けない。

仕掛を投げ入れて間もなく一番左の竿先がツンツンと揺れた。しばらく待ってもくい込まないので竿を手に持ち道糸を張りながら静かにさびいてみた。クインクインのアタリで、しっかり合わせた。なかなかの手応えなので脚立を利用して胸壁に上がると姿を見せたのは40cmほどのものだったのでゴボウ抜きできないことはない。25号の竿なので慎重に対応していると、竿先の曲がり具合から大物を予感した右の方に離れていた釣り人が同じように胸壁に上がってタモを入れてくれた。ハりはクロガシラの唇にガッチリと刺さっていた。

前回の釣行では、海水を満たしたバツカンに魚を入れておいた。物置に置いたはずのスカリがいくら探しても見あたらなかったのだ。どこにやってしまったのだろうか。1代目のスカリ？ 10年程前、遠別釣り突堤で大釣りをしたときだ。スカリにはクロガシラやカンカイ、カジカ等の獲物で満たされていた。そのスカリをコンクリート階段の手摺りにつないでおいたのだが、高波や強風のせいでビニル性のロープがコンクリに擦れて切れてしまっていたのだ。フロートが付いているので、まだ辺りに漂っているのではないかと捜すが見当たらなかった。2代目のスカリはそれから10年間も使ってきたのだ。イソメを買った時に3代目になる新しいスカリを調達しておいた。そのスカリに釣ったばかりのクロガシラを入れて、釣り場から30m程の距離にある漁港内の杭に繋いでおいた。

すぐ隣にいた御仁は、への字の正面に向けて打っていた竿の1本を上げて、私がクロガシラを上げた方向に向かって仕掛を投げ入れた。おのずと彼の道糸が私の2本の竿の道糸を跨ぐことになった。困った。意図的に意地悪をしているわけではないだろうが……。跨いでしまっても平気なのだろうか。しかし、怯んではいけない。理は私にあるのだ。私は、彼が私の正面方向に1本の仕掛を入れているので更にその左に仕掛を打っていたのだ。それを跨いできたのだ。私は先ほどと同じ方向に仕掛を投げ入れた。私の2本の道糸を跨いだ彼の道糸の上に遠投を掛けたのだ。さあ、これでどうだ。その後、彼はしばらく仕掛を上げなかった。彼の道糸の下になった私の仕掛はゆっくりと上げて彼の道糸の下を通してなんとか絡まないで上げる。彼の道糸の上になった私の仕掛は、高速で巻いて、彼の道糸の上を通すという具合だ。

幸い8時頃来た2枚目のクロガシラ40cm弱は彼の道糸の下を通すことで、絡むこともなく上げることが出来た。彼が仕掛を上げないものだから、私の道糸の3本とも彼の道糸の上を跨ぐような恰好になった。彼が仕掛を上げはじめた。私は3本の竿とも同時に手に持って高く道糸を張って彼の仕掛をやり過ぎた。気を遣うことこの上ない。しかし、彼の道糸は二度と私の道糸を跨ぐことはなかった。諦めて2本の竿を移動させて、左にある

テトラ越しに竿を出したのだ。1本の竿はへの字の正面に向けて入れたままだった。

2枚目を港内に吊したフラシに入れていると、そこにいた釣り人が覗いた。私より遅くに来てテトラ越しに竿を出していた御仁だ。彼は、私のモノよりさらに大きいクロガシラを3枚も釣っていた。そして、それで満足したのか、引き上げていった。

それからは、全くアタリが出なかったのだから、おのずと付近の釣り人と話し込むことになった。隣の釣り人は、無口だった。昨夜から釣りものが1枚もないのだ。そこに新たな釣り人である私が隣で竿を出して、早々に40cm級を2枚もあげてしまったのだ。無口になるのも頷けないわけではない。おのずと昨夜から7枚の釣果を上げている釣り人との話が中心になってくる。その釣り人がやめると言ってスカリをあげた。30cmから40cm程のものが7枚収まっていた。彼は斎藤嘉和と名乗った。昨日発行された「つりしん」の紙面を飾っていた人だった。石狩湾新港の樽川埠頭で、仲間と共に型の良いクロガシラを2枚ずつ持って写真に収まっていたのだ。もっぱら白老港や、室蘭港に通っているらしい。特に昨年の白老港で揚げた58cmのアブラコは圧巻だったと話してくれた。

新たな釣り人がやって来た。彼は門別町の伊藤と名乗った。浅黒く潮焼けしていて、一寸厳つい感じの容貌だが、ここの常連らしく斎藤氏と話しが弾んでいる。タカノハやクロガシラ、秋にはサケやカジカを追いかけているという。彼はテトラ越しに5本の竿を等間隔に立てた。彼もなかなか釣れなかったが、朝方、3枚の型モノをあげた御仁のところに入ってから型モノを3枚釣って5時頃帰って行った。4枚は縁起が悪いので釣らないのだそうだ。

塩イソメが全くもって用を足さない。カチンカチンに乾涸らびてハリを刺そうとすると砕けてしまうのだ。海水に浸けてみたが、どうも按配が悪い。今日は夜中まで釣り続けるつもりだから、生イソメが心許なく感じてきた。伊藤氏に聞くと、鶴川町に磯野釣具店があるのでそこで買うと良いと教えてくれた。彼も朝早い内に3パック残っていた中から1パック買って来たので、なるべく早いほうがよいと付け加えた。

そうなる気が気ではない。竿をそのままにして磯野釣具店に向かった。イソメは10パックほど揃えられていた。新しいイソメをパック詰めにしたらしい。その中から生きのよさそうなものを2パック購入した。ついでに近くのコンビニに寄って昼と夜の分の弁当を買った。

アタリもないので、椅子に腰掛けて竿先を見つめながらおにぎりを頬張っていると、久しぶりにアタリが出た。卵を抱えて腹がぷっくりと膨らんだ35cmほどのものだった。前回は産卵後で腹がペシャンコだったので、荒食いが始まっているとも考えていたのだが、そうでもないようだ。午後3時頃釣れたクロガシラも同じように卵を抱えていた。

ウェットスーツを着た2名の御仁がやって来た。防波堤の先端付近で素潜りして漁をしているようだった。2時間ほどで戻ってきた。浜厚真漁港では漁業権の設定がないらしく、手掴みなら捕ってもよいのだそうだ。「食べるか」という間に私が大きく頷くと、大きなウニ2個とナマコを差し出された。

夕飯を取りに車に戻った。ポケットをまさぐっても車のキーが出てこない。車から離れるときには何度も確認していたのにこの有様だ。釣り場から車の間を何度も往復して捜した。自分の通った道を思い出しながら防波堤の中間まで歩いてみてもみだ。隣の釣り人も捜してくれた。車の中に置き忘れたままカギをかけてしまったのではないかと車の中を丹念に覗き込んでみたが見あたらない。JAFに電話してみようか。しかし、車のドアを開けることが出来たとしてもキーが無ければどうにもならない。息子呼び出してスペアキーを持ってきてもらおうか。丹念に見て歩いていると、ようやく車の近くの枯れ草の上に落ちているのを発見した。キーには鈴が付いており、落とすときには甲高い音がしていたのだが、枯れ草の上だったので鳴らなかったのだろう。昔はよくキーを差し込んだまま車のドアにカギをかけてしまったものだ。その頃は車のスペアキーをナンバープレートの裏に貼り付けていたのだが、今の車はそんな事態を防げるようになっている。「キーを抜き忘れています」「ヘッドランプを点けたままです」とアナウンスしてくれるのだ。それでスペアキーを持ち歩かなくなった。認知症が進んでいる自分を思うと、やはり原点に戻っておくべきだろうか。

午後7時頃よりまたアタリが出だして午後10時に釣りを終えたときはめて10枚になっていた。隣りも一緒にやめたのだが、結局手にしたクロガシラは1枚もなかった。すぐ隣で竿を出していたにも関わらず、こんなこともあるのだ。



素潜り漁の御仁からいただいたムラサキウニとナマコ



三代目スカリに入ったクロガシラ

次の日、ナマコを捌いていると身が堅く締まって、まるでアワビのようだ。薄切りにしながら女房に「ナマコを食べるか」と聞いても返事もしない。元々ナマコは嫌いなのだ。あのグロテスクな感じが気持ち悪いのだそうだ。「ウニを食べるか」と聞いてみると、顔がほころび頷いた。すぐに皿を持ち出して差し出す。これから捌くので少し待ってというので醤油とワサビをテーブルに出して待っていた。カクーン。

【須築漁港のホッケ】

釣り日和の天気が続いていたが、仲間4人で瀬棚方面に釣りをする予定だった土・日に限って低気圧が通過し、風が強く、波も3mと予報した。私としては、平日の天気のよい時という思いはあるのだが、他の3人には、それぞれの都合がある。

4月9日（土）、約束していた10時にわが家を出発した。金井氏は既に前野宅に到着しており、前野氏は灯油の配達に出て、まだ戻っていなかった。金井氏の荷物を先に積む。竿はスピンプワーの並継ぎなので横にして積むことは出来ず、後部座席の中央に縦にして積んだ。前野氏がタンクローリーで帰ってきた。すぐに前野氏の荷物を積み込んでから嵐宅を經由して、一路瀬棚港へと向かった。

小樽の高速の料金所を通り抜けようとする、そこに警察官が立って車の中を覗いた。すると、駐車帯に止まっていたパトカーの中から警察官が出てきて指示棒を振りながら誘

導された。高速道路での後部座席のシートベルト装着義務違反だった。反則金はなく点数は1点で3ヶ月後に点数は消えるというものだ。我が息子が帝王切開で生まれた時にスピード違反したとき以来になるから40年近くゴールド免許証だった。それがなくなるのが一番辛い。

昼食は千走のカリンパでとった。午後2時だった。今は亡き浦島太郎1号こと加藤啓氏が「北海道のつり」誌上でよくこの「カリンパ」で食事をしていたことを載せていた。洋食屋のイメージだったがラーメンもあった。金井氏はカツカレーを注文した。他の3人は豚丼セット、チャーハンセット、カレーセットのラーメン付きだ。

瀬棚港に着いた。釣遊会第1回大会の釣り場範囲である中歌港～鵜泊港を確認するために、瀬棚新港、最内川、砂取り場を経由して鵜泊漁港まで足を伸ばしてみた。金井氏の言うように太櫓海水浴場を越えた辺りから道幅は極端に狭くなり1車線に待避場がついただけのものになってきた。更に、鵜泊漁港は釣りバスが駐車できるような港ではなかった。

過去に釣り大会をこの範囲で開催したことがあったが、バスはその先の通行止めで駐車していたらしい。現在は、通行止めにされていた先の道路が開通し、拡幅されて太田漁港まで続いていた。新会長と相談して大会範囲を須築港～瀬棚港に変更しなければならないだろうか。瀬棚港では、排水路前、屋根付き埠頭、向かいのサケ稚魚養育イセス、蠟燭岩等を見学した。今日は波が高いので瀬棚港内で釣りをする予定でいたが、吹き曝しの風が港の中を襲い、釣りをするどころではない。須築旧港なら西風が高い胸壁に遮られて釣りができるだろうと向かった。

須築新港に立ち寄ると、ホッケの浮き釣り師で岸壁は埋まっており、その内の一人が2泊3日で500匹ほど釣ったと、釣ったホッケを捌いて開きにしていた。付近にキャンピングカーが駐まっていた、その周りには開いたホッケを並べた魚干し網が幾つもぶら下げられていた。干し上がったモノは車の中に保存してあるという。新港でこれだけのホッケがいるのだから、旧港でも迷い込んだホッケがいるだろうと期待が膨らんだ。

防波堤先端には波が被っていたので、防波堤の付け根で4人並んで竿を出した。風は全く感じられない。しかし、カジカや小ゾイが竿を揺らすばかりでホッケの気配は感じられなかった。その夜は酒を回し飲みして眠りについた。

目が覚めてみると昨夜の波が治まり防波堤の先端でも釣りが可能になっている。そして沢山の車が次から次へとやってきた。皆さんウキ釣りでホッケを狙うようで、外防波堤の先端から順に並んでいった。私は灯台の更に左に突き出た高い防波堤に乗って釣り始めた。波がその防波堤に上がってくるようなことはない。金井氏もやってきて、すぐさまホッケを釣り上げた。2本目になったところで前野氏を呼んで、3人並んで竿を出した。嵐氏は最後まで付け根で頑張るらしい。金井氏は続けてホッケを釣り上げたが、すぐ近くで竿を出している私にも前野氏にもアタリが出ない。金井氏の仕掛を見ると上バリの下にネットとごく軽い錘を挟んで、下バリ2本が付いていた。ハリは丸セイゴの16号、道糸は張らずに弛ませてある。喰い渋ったホッケに違和感を与えることがないようにと工夫されてい

たのだ。

私は、大会でもないのでゴロやネット仕掛は持ってきていない。2本バリ仕掛けを中心に、万が一のためにと用意したロケットカゴ付きのものだ。カゴにはアミアミアミーゴを入れた。私はロケットカゴの下に付けた25号鉛を15号に取り替えて、道糸を張らずにした。ようやく私の竿にもアタリが出るようになった。道糸がスーッと張り、竿先が揺れたのだ。ホッケが釣れた。同じようにして2本目も上がった。クロガシラも2枚上がった。ホッケの顔を拝めたのだからもう今回は良しとしよう。8時には片付けて帰ることになった。

稲穂峠を越えて、仁木町のそば処「三彩（さんさい）」に立ち寄り蕎麦を食べた。午前11時を過ぎた頃だった。トイレを済ませて「三彩」から出てくると金井氏が運転席にいた。私に眠気が出ていて涙目になっていたのを見逃さなかったのだろう。キーを渡して運転を替わってもらった。フルーツ街道を通過して蘭島に抜け、またまた知らない道を通りながら小樽に着いた。南樽市場を見学し、美味そうなアンコウ鍋の材料が格安でおいてあったので、それを買った。その後も高速を使わずに帰ったのだが、私が高速を使ったのと同じぐらいのスピードで岩見沢に戻ってきた。